

多義的複合動詞「見返す」の意味分析

——意味ネットワークと分析可能性の観点から——

鷺 見 幸 美

1. はじめに

本稿は、複合動詞「見返す」を考察対象とし、多義語¹⁾であると考えて、その意味を分析する。多義語としての意味のネットワークと複合動詞としての意味の分析可能性を明らかにすることが目的である。まず、2章では、本稿の意味分析の立場を明示する。次に、3章では、先行研究を検討し、「見返す」を分析する上での課題を明確にする。続く4章で、「見返す」の3つの語義を記述するとともに、類義関係にある「見直す」との異同を明示する。さらに、5章では語義相互の関係と各語義における構成要素「見る」と「返す」の意味の寄与について考察し、意味のネットワークを示す。最後に、6章で今後の課題を述べる。

2. 本稿の意味分析の立場

本稿は複合動詞「見返す」を対象として、認知言語学の意味観に基づき、その意味を分析・記述する。分析にあたり、本稿の意味分析の立場を確認しておく。

第一に、非還元主義的アプローチをとる。「見返す」は「見る」と「返す」を構成要素とする複合動詞であり、全体の意味に構成要素それぞれの意味が寄与してはいるものの、構成要素の意味の総和が「見返す」の意味というわけではないと考える。つまり、複合動詞全体の意味は、その部分である構成要素の意味に還元できないという立場である。その立場に立てば、「構成要素が全体の意味にどの程度寄与しているか」という分析可能性が問題となる (Langacker 1987: 292-298)。

第二に、「(動的) 使用依拠モデル」に基づき、多義語「見返す」の意味を「現実の発話からボトムアップ的に得られるスキーマのネットワーク」として分析・記述する。(動的) 使用依拠モデルにおいては、語の多義性が、「構造的なものであろうと連語上のものであろうと語用論的なものであろうと、文脈は必然的に当該の記号的構造の解釈のあり方に影響を与え、そのため意味の異なる変異体が生まれる。多義性は複数の変異体が単位として定着した場合に生じる。(無論のことそれらの間に何らかのつながりが確立していることが必要で、さもなくば同音異義語ということになる。)」(Langacker 2000: 35 坪井訳 2000: 106-107) と説明される。

(1)

本稿においても、多義性をこのように捉え、「多義語の意味構造は、決して静的なものではなく、可変的なものである。ある語の新たな語義の確立までには、その語がある特定の文脈で繰り返し使用されることにより、新たな語義を定着させていくプロセスが存在する。」という立場に立ち、文脈を重視して分析を行う。

3. 先行研究の検討と分析の課題

3.1 語義記述

「見返す」は、国語辞典および『複合動詞レキシコン』²⁾において、以下のように記述されている。

『大辞林（第三版）』（以下、『大辞林』）

- ① もう一度見直す。
- ② 見られたことに対して、こちらも相手を見る。
- ③ 昔あなどられた相手に立派になった自分を見せつける。
- ④ 後ろをふり向いて見る。見返る。

『デジタル大辞泉』（以下、『大辞泉』）

- ① 後ろを振り向いて見る。振り返って見る。
- ② 一度見たものをもう一度見る。見直す。
- ③ 相手からの視線に対して、それを外さないように相手を見る。
- ④ 昔受けた侮りや辱めに対する仕返しとして、相手をしのぐ状態にある自分を誇示する。

『複合動詞レキシコン』

- ① 相手から見られたのに対して、こちらから視線を返す。
- ② 一度見たものを再度見る。
- ③ 昔ばかにされた相手に対して、現在の自分の立派な姿を誇示する。

まず、『大辞林』の①、『大辞泉』の②の記述から、「見返す」は「見直す」と類義関係にあると見なせるが、両者の違いは不明瞭である。森田（1989）³⁾等では、「一直す」と「一返す」の違いを、前者は行為の繰り返しよりは結果の修復意識が高いのに対し、後者は単なる反復行為を表し修正意識は特にないことだとしている。さらに、鷲見（2017）は、「見直す」の意味を考察し、「見返す」と類義関係にある場合の意味を「主体が情報の獲得や確認を目的として、対象を改めて見る」と記述している。本稿では、「見返す」が単なる反復行為を表すのかを検

証し、「見直す」との違いを明確にしたい。

次に、『大辞林』の②、『大辞泉』の③、『複合動詞レキシコン』の①が対応しているが、『大辞泉』の「相手からの視線に対して、それを外さないように相手を見る。」という記述は、他の記述に比べて、見方が限定されている。本稿では、この「見返す」がどのような行為を表すのか、前提となる行為との対応関係を含めて明らかにしたい。

さらに、『大辞林』の③、『大辞泉』の④、『複合動詞レキシコン』の③の記述について、以下の(1)(2)のような実例が存在することから、再検討する余地がある。

- (1) 楊兄は、なんとしても総帥になりたかったのだ。半神の身がきつすいの神を見かえすために、より力があることを誇示する必要があったのだ。(井上祐美子『乱紅の琵琶』2001)^{4),5)}
- (2) 美佐子には黙って栗田と海まで出かけはしたが、そのことでひそかに彼女を見返してやるにはあまりに呆気ない別れ方だった。(黒井千次『夢時計』1997)

「見返す」が「見せつける」「誇示する」ことを表すのであれば、(1)において、「見かえすために、より力があることを誇示する」は冗長に感じられるはずだが、そうは感じられない。また、(2)では、「ひそかに」と「見返す」が矛盾することになるが、解釈に問題はない。本稿では、この点に注目し、意味記述の精緻化を試みる。

3.2 多義語としての分析

「見返す」の持つ複数の語義が、相互に関連を持たなければ、多義語とはみなせないことになる。しかしながら、先行研究では、「見返す」の複数の語義が相互にどのような関係にあるかが示されていない。本稿では、「見返す」の持つ複数の語義の相互関係について比喩の観点から考察し、「見返す」の意味のネットワークを示す。

本稿における比喩は、以下のように定義することとする。

メタファーによる語義拡張：類似性もしくは共起性によって見出される共通点に基づく領域間写像。異なる領域への意味拡張を動機づける。

メトニミーによる語義拡張：同一フレーム内の隣接性に基づく焦点移動。単一領域内の意味拡張を動機づける。

シネクドキによる語義拡張：類種間の共通点に基づく一般化・特殊化。単一領域内の意味拡張を動機づける。

3.3 複合動詞としての分析

「一返す」の意味派生のプロセスを考察対象としている研究に、齋藤 (1992)⁶⁾、森田 (1989)、

杉村 (2006b, 2007) があるが、いずれも、複合動詞「見返す」において、「一返す」の意味が
いかに寄与しているかを詳察しているわけではない。また、「一返す」の接辞化を考察した齋
藤 (1992) は、意味的に前項と後項とに分けられない場合を考察対象から除くとし、その一
つに「世間の人を見返す」の「見返す」を挙げている。しかしながら、複合表現の分析可能性
は程度性的の問題であり、構成要素を持つ以上、構成要素の意味が全く寄与していないとは考え
にくい。

『複合動詞レキシコン』では複合動詞の語構造が表示されており、「見返す」は Vs 型とされ
ている。Vs 型とは、「前項動詞 (V1) は本来の意味と格関係を持つが、後項動詞 (V2) は文
字通りの意味が希薄になっていて、格関係 (項構造) もほとんど失われ、補助的 (subsidiary)
な動詞になっている。」「Vs タイプの後項動詞 (V2) は、元来の動詞としての機能を失い、前
項動詞 (V1) を修飾するという補助的な機能になっている。そのため、文全体の格関係はもっ
ぱら V1 によって決定される。」と説明されるものである。この Vs 型は、例えば、「死に急ぐ」
であれば、「死んで、急ぐ」「死にながら、急ぐ」とは言えないように、「V1て、V2」や「V
ながら、V」という形で言い換えることができず、「急いで死ぬ」と言えるように、逆に動詞
の前後関係を逆転させて言い換えることが可能であるということである。さらに、この型の後
項動詞の特徴が 6 点挙げられているが、ここでは、その第 2 点「V2 (補助動詞) は、単独で
用いられたときの動詞と意味が異なる。」、第 6 点「V1 と V2 の意味解釈が単純ではないため、
幼児や外国人学習者は習得に時間がかかると思われる。また、成人でも意味が正確につかめず
誤用が起りやすい。」という特徴に注目したい。後項動詞は、「文字通りの意味が希薄になっ
ている」としても、全体の意味に何らかの寄与をしているということが示唆される。また、齋
藤 (1992) が「見返す」の中でも「世間の人を見返す」の「見返す」のみを、意味的に前項
と後項とに分けられない場合として考察対象外としていることから窺えるように、「返す」
の意味の寄与のあり方は、語義によっても異なると考えられる。本稿では、先行研究の分析を
踏まえながら、多義語「見返す」の各語義における構成要素の意味の寄与を考察する。

4. 「見返す」の有する複数の語義

本章では、「見返す」に 3 つの語義⁷⁾を認め、それぞれの語義を記述する。

4.1 第一義：主体が相手から見られたことに応じて、相手を見る

この第一義の「見返す」は、以下の (3) のように、自分を見る相手の行為に応じて、相手を見
ることを表す。

- (3) 子どもが自分をじっと見ていると気づいたら、こちらも向うの目を、見返してあげて

ください。(林春男『災害ストレス』1995)

「子どもが自分をじっと見ていると気づいたら」という文脈に、主体の「見る」行為が相手の「見る」行為に応じたものであることが明示されている。しかし、次の(4)のように、相手の「見る」行為が(3)のようには明示的ではない場合もある。

(4) 「動くんじゃない!」と、飯島は、眼を血走らせて、怒鳴った。十津川は、冷やかに、飯島を、見返した。(西村京太郎『寝台特急六分間の殺意』1990)

「動くんじゃない」と怒鳴った相手が見返す対象である。その相手の「見る」行為は言語化されていないが、相手の血走った目は主体に向けられ、主体の一挙手一投足に注意を払っていると考えるのが自然であろう。一方、主体は相手を「冷やかに」見ている。

齋藤(1992)は、「一返す」は、返される行為と前提となる行為が何らかの意味で対を構成していなければならないことを強調するとともに、その対応関係が全く同じものから同種、単に相応するものまで幅広いことを指摘している。

(5) 〈この男は、一言も口をきいておらん〉藤堂は反撥して、黒木をみつめた。見返した黒木の頬にわずかに笑みがうかんだ。(齋藤1992: 191)

(6) 「ねえ、その折口信夫ノことだけどー」今までずけずけともの言っていた涼子の様子が急にかわった。僕は物問いたげな視線で彼女を見返した。(齋藤1992: 193)

(5)は両者の行為の関係が同種である例として挙げられている。(6)は、「涼子」の発話に対して「僕」が「一返し」た行為は、単に「見る」というよりは、「物問いたげな視線で彼女を見る」という行為であり、[[物問いたげな視線で彼女を見返す]と解釈されると説明されている。

つまり、この第一義は、相手の見方、主体の見方に限定はなく、「相手が主体を見る」行為と「主体が相手を見る」行為が対応したものである。この第一義を、以下のように記述する。

第一義：主体が相手から見られたことに応じて、相手を見る

4.2 第二義：主体が以前に見た対象をもう一度見る

この第二義の「見返す」は、「見直す」と類義関係にある。次の(7)(8)は、いずれも同じ「名刺」を対象として、「見直す」「見返す」が使われている。

- (7) 京急蒲田駅のホームに電車が到着した。中志郎がためらわずに席を立ち、僕は彼の名刺を見直してそこに携帯の番号が記されているのを確認した。「じゃあ僕はここで」中志郎がこの日何度目かになるお辞儀をした。(佐藤正午『野生時代』2005)
- (8) なにも記入しないままだと、その名刺を見返しても、不思議なくらいなにも思い出せない。これでは名刺交換をした意味がまったくないに等しい。(大勝文仁『ここで差がつくメモ術・手帳術』2005)

「見直す」が用いられた(7)は、名刺を渡した本人がその場にいる状況である。この「見直す」を、鷲見(2017)は、「主体が情報の獲得や確認を目的として、対象を改めて見る」と記述している。それに対し、「見返す」が用いられた(8)は「思い出せない」という文脈に示されるように、前に見たときから時間が経過し、見た内容を覚えていない状態である。以下の(9)(10)(11)でも同様である。

- (9) しかしここ数年で成田も随分変わりました。数年前の成田の写真を見返しただけでもANAはポケモンジェットUSAがあり、JALは鶴丸がバリバリ、リゾッチャジャンボにDC-十も飛び、ノースは旧塗装がゴロゴロ、ヴァリグにフィンエアはMD-十一と当たり前のように飛んでいたものがみんな撮れなくなっていました。(Yahoo! ブログ, 2008)
- (10) 警察の事情聴取を終えた通行人や車の運転手をわっと囲んで質問を浴びせる。年配の住民が散歩をしており、遺体の目撃談も次々聞けた。みな、人形を置いた、いたずらと勘違いしていた。取材メモを見返せば、描写の生々しさにたじろぐが、その時は細かく聞こうと、いくつも質問を投げかけた。(宮沢之祐『報道される側の人権』1999)
- (11) その後・・・、ときどき使っているので数百枚くらいはたまっている。アイデアだの新聞の切り抜き貼ったやつだの。でも・・・あまり見返していない。システム手帳、Bidexはもう二十年近く使っている。精神療法覚え書きなんか、本にもなりそうな内容。カードや手帳に、その時々の思いを書いているが見返していない。(Yahoo! ブログ, 2008)

このように、「見返す」は「前に見たときから時間が経過し、見た内容を覚えていない状態で再び見る」ことを表すという意味で「反復行為」を表す。この第二義を以下のように記述する。

第二義：主体が以前に見た対象をもう一度見る

次の(12)(13)は、同じ「顔」を対象として「見直す」「見返す」が使われているが、両者は

類義関係にない。

(12) 「(前略) 古館さん、お心当たりはありませんか」古館弁護士はギョツとしたように、金田一耕助の顔を見直したが、その顔には、みるみる、はげしい混乱の色がうかんでくる。(横溝正史『犬神家の一族』1972)

(13) 「モンゴル時代に日本を侵略しようとしたフビライの意図は、おそらく中国古代の戦略書でいう“遠交近攻”だったと思います」「は？」意味のわからない時宗は祖元の顔を見返した。(童門冬二『決断』2000)

(12) の「見直す」は、「相手の腹の内を知りたくて相手の顔を改めて見る」と解釈でき、(7) の「見直す」と同じ意味を表すが、(13) の「見返す」は、「相手から見られたことに応じて、相手を見る」と解釈され、(9) から (11) の例とは異なり、第一義を表す。

「見直す」が有目的行為であるのに対し、「見返す」は反復行為であるが、以下の(14)(15)のような作品を鑑賞するような場合には、両者が区別なく用いられていて、意味においても、自然さにおいても、違いがほぼ感じられない。

(14) DVD で何度も見直していますが、また映画館で観たい作品です。(Yahoo! 知恵袋, 2005)

(15) 私は海外へ引っ越す為に、自分の好きな何度も見返したいドラマを十タイトル分落札しました。(Yahoo! 知恵袋, 2005)

「鑑賞」というのは、以前に見たものをもう一度見ようとして結果として何か新しい発見をすることもあり、逆に、何か新たな発見を求めて見ても結果的には何も発見できないこともあるために、一般的に「反復行為」であるか「有目的行為」であるかをほとんど意識しないためであろう。文脈によっては、「鑑賞」であっても、いずれかが選ばれやすくなる。

(16) 好きなドラマなのに、子どもが騒いでいたので集中できなかった。今度一人のときに {見直そう・見返そう}。

(17) 録画したドラマを暇にまかせてなんとなく {見直して・見返して} いたら、いつの間にか眠ってしまった。

(16) は有目的行為の「見直す」が、(17) は「反復行為」の「見返す」が選ばれやすいと言えるだろう。このことから、「見直す」と「見返す」の意味の違いが不明瞭なわけではなく、現実世界のあり方として、目的をもって改めて行うことと、単に反復して行うことを区別する意義

がほとんどないことがあり、それが両者の使い分けを不明瞭にしているのだと考えられる。

4.3 第三義：主体がかつて自分を侮った相手に、侮ることのできるような自分ではないことを認識させる

第三義は、第一義同様に、主体に向けられた相手による行為を前提としている。その前提となる行為は主体を侮る行為であり、(18)のように直接的な場合も、(19)のように間接的な場合もある。

(18) 顔のほほとあごを部分やせしたいです。学校でデブとよく言われているので見返したいです。(Yahoo! 知恵袋, 2005)

(19) 私は以前大勢スタッフのいる店で働いていましたが、若い従業員からタメ口を聞かれたりして気分が悪かった事がありました。「言葉遣いが悪いよ」と注意する勇氣もなく悔しい思いしてましたが、これは後輩にもなめられる要素が自分にもあるんだと反省。あなたも仕事で見返して下さい。皆に尊敬される人物になれば自然と「さん」付けで呼ぶようになるでしょう。(Yahoo! 知恵袋, 2005)

(18)は、「部分やせすることによって、かつて自分を「デブ」と言った相手に、「デブではない」「かわいい」と思わせたい」と解釈できる。また、(19)は、「仕事で尊敬される人物になって、なめてタメ口をきいた後輩に、タメ口がきける相手ではないと思わせてください」と解釈できる。さらに、以下の例で、認識評価が問題であることを確認する。

(20) 「お前ら、恥ずかしくないのか」と叱りつけた。じっと聞いていた椎野は拳を握りしめ、涙をぼろぼろ流し悔しがって、「私は今まで演劇なんてどうでもいいと思っていましたが、演劇、続けます。室井さんのことを見返すまで絶対やめませんから」と宣言した。椎野はそれから、「さいたま芸術劇場」の竹内銃一郎さんのワークショップに入ったり、禿は踊りを習い始めたりした。(室井尚『教室を路地に!』2005)

(21) 「そんなに世の中のことが分って、見栄も何もなくなって、それから恋をしようと思ったら、六十歳になっちゃうんじゃないか? 君が人を信じてたのは、少しも間違っちゃいないよ。君が馬鹿だったなんてことはない。その男が悪かったんだ。そいつが馬鹿だったんだよ。ただ君は…その男を見返してやれるまで生きていられなかった。——それは残念だけれどもね」——静かだった。シャープペンシルが、音もなく動いて、〈私が幽霊でなかったら——〉と、書いた。〈あなたに抱きついて、キスしてたわ〉片山は青くなった。やっぱり相手が幽霊でも、青くなるのである。(赤川次郎『三毛猫ホームズの騒霊騒動』1988)

- (22) 「自分を馬鹿にしてきた人間に思い知らせてやりたいって気持ち、分かるじゃないのさ…世の中を見返してやりたいって気持ち、分かるじゃないの」(鎌田敏夫『会いたくて』1989)

まず(20)は、「役者としてうまくなくて、室井さんにそれを認めてもらうまで絶対やめない」と解釈できる。次に(21)の「君が馬鹿だったなんてことはない。その男が馬鹿だったんだ」という文脈に、相手であるその男の認識評価が問題であることが示されており、「見返してやれるまで生きていられなかった」は、「認識を改めさせるまで生きてられなかった」と解釈できる。さらに(22)では、「思い知らせてやりたい」が「見返してやりたい」で言い換えられており、認識評価が問題であると言える。この第三義を、以下のように記述する。

第三義：主体がかつて自分を侮った相手に、侮ることのできるような自分ではないことを認識させる

このように記述することにより、以下の例で、冗長性や矛盾が感じられないという問題も解決される。「見返す」ことは、「見せつける」ことや「誇示する」ことを表すのではない。

- (23) 楊兄は、なんとしても総帥になりたかったのだ。半神の身がきつすいの神を見かえすために、より力があることを誇示する必要があったのだ。(井上祐美子『乱紅の琵琶』2001) ((1)を再掲)

(23)の「見返すために、力を誇示する」は、「認識を改めさせるために、力を誇示する」と解釈できる。この第三義は、上掲の(22)及び次の(24)のように、「見返してやる」の形で使用される例が比較的好く見られる。

- (24) 美佐子には黙って栗田と海まで出かけはしたが、そのことでひそかに彼女を見返してやるにはあまりに呆気ない別れ方だった。(黒井千次『夢時計』1997) ((2)を再掲)

自分を侮る相手に対しては、怒りや口惜しさを感じることは自然である。そのため、「話し手より目下の人(または話し手側の人)が何かの行為をすることを表す。怒りの表現として、相手の嫌がることをするという意味で使われることもある。」(グループ・ジャマシイ1998: 296)と説明される「V-てやる」が共起しやすいのである。

さらに、(24)で注目したいのは、「ひそかに」との共起である。ひそかに行動していたのでは、侮ることのできるような自分ではないことを認識させることはできないはずであり、「ひ

そかに相手の嫌がることをして、仕返し（復讐）する」と解釈される。「相手の嫌がること」というのは、「悔ることのできるような自分ではないと相手が認識するだろう」と主体自身が考えることであり、それをすることによって怒りや口惜しさを収めるのである。上掲の(22)の「世の中を見返す」も、世の中全ての人に侮られることも、世の中全ての人々の認識を改めさせることも考えにくい、「世の中全ての人に侮られたかのように感じている」主体が、「悔ることのできるような自分ではないと世の中の人々が認識するだろう」と考えることをすることによって、怒りや口惜しさを収めるのである。

第三義の「見返す」は、文脈依存度が高く、文脈によって焦点化されている側面が変わり、その意味が柔軟に変容する。次の(25)は、「(相手を)見返す」が「(相手に)自分のしたことを後悔させる」と解釈可能である。

- (25) いつまでも過去の恋にしがみついているのは情けないとは思っても、一方的に別れを切り出された場合など、想定していなかった別れだったときは未練は募るもの。「私をフット元彼を後悔させてやる！」と振られた悔しさかた見返す、という気持ちも芽生えてきますよね。いつまでも悔しい気持ちを引きずらずに次の恋に進むためにも、いい女になって見返しちゃいましょう！今回は元彼を見返す方法を6つ、ご紹介します！（神崎桃子，2015「LAURIER PRESS（ローリエプレス）」<https://laurier.press/>）

(25)は、前提となる相手の行為が「ふる」といった主体との関係を断つような行為であり、「相手が主体のことを「いい女になった」「きれいになった」と認識することで、関係を断つたことを後悔する」という語用論的推論が成り立つことによる。文脈に示される相手と主体との関係によっては、その語用論的推論が焦点化され、「後悔させる」という意味で使用、解釈されると言える。

また、次の(26)は、「(相手を)見返す」が「(相手より)優位な立場に立つ」と解釈可能である。

- (26) 友達を見返す結婚相手、恋人の条件。三十路で婚活中ですが、いいと思う男性が見つかりません。ここまで探してるんだから、先に結婚した同級生の友達よりもハイスペックな男性がいいです。(Yahoo!知恵袋，2017)

(26)の「友達」は「(主体から見て)ハイスペックな男性と結婚した」というだけなのだが、それによって主体が友達に「「こんなハイスペックな男性とは結婚できないだろう」と見下されたと感じた」という前提がある。つまり、「友達を見返す」結婚相手とは、その相手に、「自分よりハイスペックな男性と結婚したなんて、うらやましい」と認識させ、友達より優位な立

場に立つことができる結婚相手である。つまり、主体が相手を「競争相手」とみなしていることが文脈に示されていれば、「悔むことのできるような自分ではないことを認識させることで、相手と主体の立場（上下関係）が逆転する」という語用論的推論が焦点化され、「(相手より)優位な立場に立つ」という意味で使用、解釈されると言える。

さらに、文脈から「主体が相手にダメージを与えたいほどの強い怒りや口惜しさを感じ、相手を敵とみなしている」ことが読み取られれば、主体がかつて自分を悔った相手に、悔むことのできるような自分ではないことを認識させることによって、「仕返し（復讐）する」という語用論的な含意が焦点化されて解釈されると考えられる。

このように、第三義の「見返す」は、文脈依存度が高く、文脈によって焦点化されている側面が変わり、その意味が柔軟に変容する。それが、この語の使用を困難にもしていると言える。

5. 意味のネットワークと分析可能性

まず、斎藤（1992）に基づき、「返す」と「一返す」の意味を確認する。斎藤（1992）は、複合動詞後項「一返す」の意味がどのように抽象化し、接辞化するかを、特に単独用法「返す」の意味の関わりという観点から考察している。斎藤（1992）で記述されている「返す」と「一返す」の意味を以下にまとめる。

単独用法「返す」	後項「一返す」
[-] 物体の表裏の向きを逆にする。【反転】	[1] 物体の表裏の向きを逆にする。
[二] 対象を今までの方向とは反対の方向へ移動させる【逆方向への移動】 ① 物対象 ② 事柄対象 ③ 人対象	[2] ある方向への移動、働きかけに対して、それとは反対方向への移動、働きかけを行う。 (1) 反射、反動作用を表す。 (2) 他者からの行為に対して、こちらからもそれに対応する行為を行う。 (3) こちらに戻ってくる事物にある作用を加え、移動方向を逆にする。 (4) 離れていく事物をこちら側へとひきもどす。
[三] 対象を変化以前の状態へもどす。【もとの状態への変化】	[3] もう一度（何度も）同じ動作、行為を行なう。
[四] 移動してきた方向へもどる。【来た方向への後もどり】	[4] 移動してきた方へもどる。

表中、網掛け部分、[-] 対 [1]、[四] 対 [4] は、単独用法「返す」と後項「一返す」が直接対応していて、両者の表す意味がほぼ同じものであるような場合だとされている。

両者の関係の仕方には、この直接対応の他、間接対応と呼ばれる対応がある。間接対応とは、両者の意味が同じではないが、何らかの関連性をもつ場合だとされる。また、直接対応と間接対応は、後項が語基であるか、接辞であるかという違いがある。

間接対応は、[二] ①と関連づけられる [2] (3)(4)(1)のグループと [二] ②と関連づけられる [2] (2)、[3] のグループに分けられ、「(相手を見返す)」は [2] (2)の例として挙げられ、「(もう一度)見返す」は [3] の例として挙げられている。いずれも「一返す」が単独用法とは間接対応の関係にあり、接辞化されているとみなされている。そして、接辞性を意味の抽象化の観点から見た場合、[2] (2)と [3] は、[2] (3)(4)(1)に比べて接辞性が高いと判断されている。つまり、「一返す」の意味の抽象性が高いということになる。[2] (2)と [3] の接辞性の強弱については、生産性の観点から、[2] (2)より [3] の方が少し高いように思われると述べられている。

「世間の人を見返す」の「見返す」は、前述したように、考察対象から除かれている。

次に、4章で見た「見返す」の3つの語義を、以下にまとめて示す。

第一義：主体が相手に見られたことに応じて、相手を見る。

第二義：主体が以前に見た対象をもう一度見る。

第三義：主体がかつて自分を侮った相手に、侮ることのできるような自分ではないことを認識させる。

では、第一義と第二義はどのように関連づけられるだろうか。斎藤(1992)は、[3]「もう一度(何度も)同じ動作、行為を行なう。」ことを表す「一返す」は、[2] (2)「他者からの行為に対して、こちらからもそれに対応する行為を行う」ことを表す「一返す」との関連性があると指摘し、後者においては、前提となる相手の行為とそれに対応する主体の行為とは、何らかの意味で対を構成しており、方向性を捨象して行為のみに目を向ければ、同じ行為が繰り返されていると見ることができると説明している。つまり、第一義の後項「一返す」と第二義の後項「一返す」は、ともに「返す」の意味が抽象化しており、「同じ行為の繰り返し」を表すという点で共通している。同時に、「見返す」という多義的複合動詞の第一義と第二義は、「視覚・認識行為⁸⁾の反復+方向性」というフレームにおける「視覚・認識行為の反復」の焦点化というメトニミーにより、視覚・認識行為の逆方向の反復から方向性の捨象された視覚・認識行為の反復へと語義が拡張したという関係が見いだされる。つまり、第一義と第二義は、分析性が高く、それぞれ「見る」と「一返す」が接続している可能性があるが、同時に「見返す」全体としての第一義と第二義がメトニミーにより関連付けられ、ネットワークを成して一語としてのまとまりを産み出していると考えられる。

第三義は、どのように関連づけられるだろうか。次の(27)は、第一義と第三義の関連性を感じさせる。

(27) イラストレーター 8 で、だいたい基本ツールは使いこなせているのですが、『おおっ!』

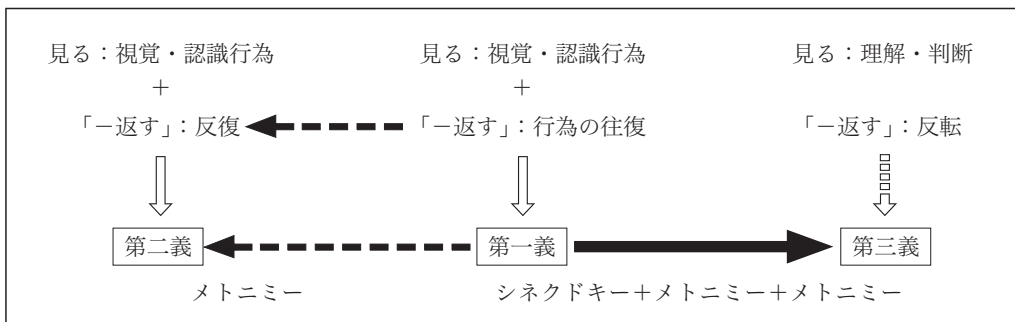
というようなコマンドがあれば教えていただきたいのです……こないだ先輩にそんな事も知らないのかというようなまなざしで見られたのが悔しいので、見返してやりたいのです (Yahoo! 知恵袋, 2005)

(27)の「見返す」は第三義を表し、「主体は、先輩も知らないようなイラストレーター 8 のコマンドを使えるようになって、先輩に「すごい」と思わせてやりたい」のだと解釈できる。その前提となる先輩の行為は、「そんなことも知らないのかというまなざしで主体を見る」という行為であり、それは「そんな事も知らないのかと主体を侮る」行為でもある。主体の「見返す」という行為に戻れば、「「すごい」と思わせる」ということは、同時に、「「すごい」と驚く先輩を、「そんなことも知らないのか」というまなざしで見る」ということを可能にする。

つまり、第三義は、このように成立していると考えられるのではないだろうか。まず、第一義の「主体が相手に見られたことに応じて、相手を見る」の「見る」が、「侮るような目で見ると」に特殊化し、シネクドキーにより「主体が相手に侮るような目で見られたことに応じて、相手を侮るような目で見ると」に拡張する。そこから、「侮るような目で見ると」から「侮る」へ焦点移動し、メトニミーにより「主体が相手に侮られたことに応じて、相手を侮る」に拡張する。さらに、「侮ることのできるような自分ではないことを認識させることによって、相手を侮る」というフレームにおいて、「侮ることのできるような自分ではないことを認識させる」に焦点移動する。つまり、メトニミーによって拡張する。同時に、「侮ることのできるような自分ではないことを認識させる」ということは、「侮る」「侮られる」という立場が逆転することであり、「返す」（「-返す」）の「物体の表裏の向きを逆にする」という反転の意味が支えている。

「見返す」の第三義の解釈が文脈により変容する柔軟性を見せること、使用に困難さを感じさせること背景には、このような複雑な語義拡張のプロセスがあると考えられる。

以上の考察から、「見返す」の意味のネットワークは、以下のようにまとめられる¹⁰⁾。



第一義から第三義への太黒線矢印は、第一義から第三義への拡張を表している。そして、その

第三義は、理解・判断行為を表す前項動詞「見る」⁹⁾と反転を表す後項動詞「返す」の意味の寄与によって支えられている。第一義から第二義への破線黒矢印は、視覚・認識行為を表す前項動詞「見る」と反復を表す後項動詞「返す」の接続によって生じた複合動詞の意味を、第一義からのメトニミーが支えていることを表す。

6. おわりに

以上、非還元主義の立場に立ち、文脈を重視して、「見返す」の意味を考察し、3つの語義を記述するとともに、その相互関係、及び、意味のネットワークを明らかにした。本稿の分析により、「見返す」と「見直す」の意味の異同を明らかにし、「見返す」は反復行為であることを明示した。また、「世間の人を見返す」の「見返す」が、他の語義と関連付けられ、多義語のネットワークを成していると同時に、「見る」の理解・判断の意味と「返す」の反転の意味によっても支えられていることを示した。また、この語義の柔軟な理解・使用の背後に、この複合的で複雑な拡張プロセスがあることを述べた。

注

- 1) 国広 (1982: 97) は、「同一の音形に、意味的に何らかの関連を持つふたつ以上の意味が結びついている語」と定義している。本稿もこの定義に従う。
- 2) 『複合動詞レキシコン』は、国立国語研究所ホームページで2013年3月29日より公開されているオンラインデータベースである。動詞+動詞型の複合動詞2,700語以上に意味的・文法的情報が付与されている。
- 3) 初出は1977年である。森田 (1989) は、森田 (1977) を含む合本として出版されたものであり、本稿では森田 (1989) を参照した。
- 4) (25)(26) 以外の実例は全て「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」(国立国語研究所) からコーパス検索アプリケーション『中納言』を使用して検索・収集した。出典は執筆者、書名、出版年の順に示した。(25)(26) は、検索エンジン Yahoo! により検出された実例である。
- 5) 実例中、分析対象語には二重下線、分析対象語以外の注目すべき箇所には下線を施した。
- 6) 齋藤 (1992) の初出は齋藤 (1985) であるが、その「あとがき」において、内容面においても必要と認められた箇所については、加筆修正が加えられていることが記されている。本稿では齋藤 (1992) を参照した。
- 7) 『大辞泉』で「後ろを振り向いて見る。振り返って見る」の例として挙げられている「見返す顔に涙があふれていた」のような例は収集されなかったため、本稿では『複合動詞レキシコン』同様、「見返す」に3つの語義を認める。より広く実例を収集すれば、このような使用例も見られる可能性はある。失われた語義か否か、今後の課題としたい。
- 8) 田中 (1996) は、「みる」の基本義 (第1義) を〈視覚によって対象を認知する〉、第2義を〈対象を視覚的に認知し、さらに高次の理解・判断を行う〉と分析・記述したうえで、第1義と第2義の連続性を指摘し、「第1義と第2義の二つをまとめて基本義とみなすという方法も考えられる」と述べている (p. 62)。「見返す」の第1義と第2義においては、いずれも「みる」の「高次の理解・判断」を伴うとみなせる実例と「高次の理解・判断」を伴わないとみなせる実例が存在することから、「みる」の第1義と第2義を区別せず、「視覚・認識行為」とすることとする。

- 9) 田中 (1996) は、「みる」の第 4 義を〈対象を理解・判断する〉と記述し、その例に「重く・軽くみる」「上に・下にみる」を挙げている。
- 10) 図において、語義の第一の成立プロセスが実線で示され、それを支える第二のプロセスが破線で示されている。

参考文献

- 国広哲弥 (1982) 『意味論の方法』大修館書店。
- グループ・ジャマシイ (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版, 376-377。
- 斎藤倫明 (1992) 「第 3 部第 1 章 複合動詞後項の接辞化—「返す」の場合を対象として—」『現代日本語の語構成論的研究—語における形と意味—』ひつじ書房, 180-199。
- 杉村泰 (2006a) 「コーパスを利用した複合動詞「一直す」の意味分析」『言語文化論集』第 28 巻第 1 号, 51-66。
- 杉村泰 (2006b) 「本動詞「返す」と複合動詞「一直す」の意味の対応について」『ことばの科学』第 19 号, 157-165。
- 杉村泰 (2007) 「複合動詞「一直す」の多義分析」『日語教育』第 38 輯, 139-159。
- 鷲見幸美 (2017) 「多義語「見直す」の意味分析」『論集：日韓学術交流会—言語文化を巡って—』3 号, 27-40。
- 田中聡子 (1999) 『視覚動詞の意味論』名古屋大学博士学位論文。
- 姫野昌子 (1999) 「第 10 章「～なおる」と「～なおす」」『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房, 197-206。
- 初山洋介・深田智 (2003) 「第 3 章 意味の拡張」松本曜 (編) 『認知意味論』大修館書店, 73-134。
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店。
- 由本陽子 (2005) 「第 5 章 日本語の複合動詞Ⅲ—統語的複合動詞の意味解釈のメカニズムとその二面性—」『複合動詞・派生動詞の意味と統語』ひつじ書房, 220-328。
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar Vol. I*, Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2000) 'A dynamic usage-based model.' In Michael Barlow and Suzanne Kemmer (ed.), *Usage-based models of language*. CSLI Publications. [坪井栄治郎訳 (2000) 「動的使用依拠モデル」, 坂原茂 (編) 『認知言語学の発展』ひつじ書房, 61-143.]

参考オンラインツール

- 国立国語研究所 『基本動詞ハンドブック』
- 国立国語研究所 『現代日本語書き言葉均衡コーパス通常版』(検索アプリケーション「中納言」)
- 国立国語研究所 『複合動詞レキシコン』

参考辞書

- 柴田武・山田進 (編) (2002) 『類語大辞典』講談社。
- 小学館国語辞典編集部 (2016) 『デジタル大辞泉』小学館。
- 田忠魁・泉原昇二・金相順 (1998) 『類義語使い分け辞典』研究社。
- 松村明 (2006) 『大辞林』(第三版) 三省堂。

キーワード：認知言語学、非還元主義、使用依拠モデル、意味ネットワーク

Abstract

A semantic analysis of a Japanese polysemic compound verb “Mikaesu”:
From the perspective of semantic network and analyzability

SUMI, Yukimi

This paper presents a semantic analysis of Japanese polysemic compound verb “Mikaesu” from the perspective of Cognitive Linguistics. It describes the plural meanings taking the approach of non-reductionism, and it examines the semantic network as a polysemic verb and the analyzability as a compound verb. Taking the bottom up approach, it focuses on the importance of the context.

As a result, it shows that the basic meaning is extended to two metonymical meanings and three meanings make a semantic network as a polysemic verb, and also the meaning contribution of the first verb and the second verb are recognized in each of the three meanings.

Previous studies did not make it clear how “Mikaesu” used in “mo ichido mikaesu” differs from a synonym “Minaosu,” but this paper claims that it focuses on repetition unlike “Minaosu”. Previous studies which examined “Kaesu” as the second verb of a compound verb “Verb-kaesu” excluded “Mikaesu” used in “seken no hito o mikaesu” from the examinations as a case of compound verbs which cannot be divided into the first verb and the second verb, but my results shows that it is an extension of “Mikaesu” used in “aite (no kao) o mikaesu,” and also it is supported by “Kaesu” which means “turn over.” The semantic extension to this meaning is mainly based on metonymy, but its path is a compound and complicated, and it seems to be the reason of the difficulty and the flexibility of understanding and using it.

Keywords: Cognitive Linguistics, nonreductionism, usage-based model, semantic network